# 沖田神社の祭寿司

岡山藩では 1654 年前後と 1674 年前後の 2 度にわたって大飢饉を経験し、多数の餓死者を出した。綱政と永忠は幕府の方針に従い米の増産を目指し新田干拓を進めた。

1679 年に倉田新田完成。

1684 年に幸島新田完成。

1685 年に沖新田の干拓命令と進んで津田永忠が干拓計画を立てたが、蕃山の藩政批判が強く、新田干拓に反対したなかで、藩内に蕃山側に同調するものも多く、綱政は新田干拓を延期して後楽園の築造に努めた。

1691 年 9 月に沖新田着工命令が出て永忠は 1694 年に沖新田を完成させた。

沖新田が完成すると農民の分譲とともに沖田神社の建立が始まり完成した。沖田神社には飢饉のときに役人たちが農民を餓死から救済できなかった経験に基づき、池田家の予算で神の力を借りて強力に救済計画を進めるという願いが込められていた。洪水の時に最初に浸水する場所に社殿を建てた。最初に沖田神社の役人が浸水に気づき救済に当たるためだった。

綱政と永忠は浸水がなくても農民を救済できる信用できる人物を探していた。かねてから処遇を考えていた同じ大名清水宗治の一族の子孫の代表者清水伝兵衛は信用できると考え交渉して沖田神社へ迎えた。清水伝兵衛が移住してきた 1705 年以後沖田神社の経営が清水伝兵衛に移り、洪水等の救済資金は池田家から伝兵衛に寄付されることになり、池田家留帳にもその旨が記載された。伝兵衛の救済活動は綱政・永忠の期待したとおりだったので、1710 年からは宮地として 50 石の年貢を納めてもらえるだけの農地が神社領として池田家から沖田神社に寄付された。

伝兵衛は自主的に救済活動を続け、救済の対価として労働の提供を得ていた。領土は幕府の所有物で、藩主は幕府から領土を借りて、借りた領土を農民に貸して、農民は借地代を年貢として支払う形になっている。低湿地で不作の原因になる農地を嵩上げすることは、農民にとっても藩主にとっても利益になった。低湿地を 10 年、15 年と嵩上げ工事を進めた結果、他の農地に劣らない状態になった。

伝兵衛に入る年貢は救済資金には余るようになったが、藩主はそれを住民のために使うよう指示した。食料が豊かな時代ではなかったので、伝兵衛は沖田神社の祭の日にちらし寿司を作って参詣者に振る舞うことにした。余剰資金をちらし寿司の材料費及び寿司の作り手の日当などに充てることにした。余剰資金にゆとりができると、2 日間、3 日間と寿司を振舞う日数が増加した。5 月 9 日・10 日・11 日及び 10 月 9 日・10 日・11 日が祭の日とされるようになった。祭の日に参詣できる人には祭の寿司が振る舞われたが、参詣できない人には寿司を振舞うことができなかった。そこで余裕のある家では自宅で寿司を作って家族全員で食べるようになって広まっていった。これが沖新田特有の祭寿司である。

この習慣は敗戦により、沖田神社が宮地を失ったため、神社で寿司を振舞うことができなくなったことから衰退へと転換していったが、今でも 5 月 10 日前後や 10 月 10 日前後にちらし寿司を食べる習慣を続けている家族は少なくなったが残っている。

以上　沖田神社総代長　谷川喜洋士　086-277-3635